様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 27 日現在

機関番号：33901
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：20580252
研究課題名（和文）　農本思想の現代的意義に関する研究

研究課題名（英文）A Study Concerning *"Nōhon-Shisō"* (Agriculture-is-the-base-ism) Considering Its Contemporary Significance

研究代表者
岩崎　正弥（IWASAKI MASAYA）
愛知大学・経済学部・教授
研究者番号：40221791

研究成果の概要（和文）：
農本思想とは、農に特別の価値を認め、その価値を社会の中で追求・実現しようとする思想である。本研究を通して以下のことを明らかにした。１）農本思想は 1945 年で終息したのではなく、戦後の農村教育や農政にその一部が継承され、帰農や地域づくりにおいて現代にもその影響がみられる。２）日本固有の思考様式だったのではなく、中国の村治運動やアメリカのアグラリアニズムにも認められるように、一種の普遍性をもつ哲学であった。また「社稷」概念は現代においてこそ再評価されるべきである。

研究成果の概要（英文）：
"Nōhon-Shisō" (Agriculture-is-the-base-ism) is a concept or philosophy that recognizes the special values in *"nō"* (agriculture, the peasantry, rural areas), and moreover, pursues and attempts to realize these values in society. This study shows as follows: 1) *"Nōhon-Shisō"* did not fade away after 1945; some of this philosophy was carried over into rural education and agricultural policies in postwar era; and we can find its influence in various contemporary social phenomena, for example, *"kinō"* (to become a peasant), *"chiiki-zukuri"* (local husbandry). 2) *"Nōhon-Shisō"* is not a particular Japanese way of thinking, and is a sort of universal philosophy, as recognized in the Chinese *"sonchi-undo"* (village governance movement) or in American agrarianism. Moreover, the idea of *"sha-syoku"* (agriculture-based essential community) should be reevaluated even contemporary society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
総　計	3,700,000	1,110,000	4,810,000

研究分野：農学
科研費の分科・細目：農業経済学・農業経済学
キーワード：農本思想、農本主義、社稷、アジア主義、帰農、石黒農政、地域づくり、アグラリアニズム、庄内地方

１．研究開始当初の背景

本研究はすでに農本思想研究に一定の業績をもつものを中心に（※）、さらにその現代的意義を考察するために進められた。

（※）研究代表者、分担者の主な業績の一部は以下の通りであった。

・岩崎正弥『農本思想の社会史－国体と生活の交錯－』京都大学学術出版会、1997 年。
・岩崎正弥「農本主義の社会哲学－地域づくり論の視角から－」『経済史研究（大阪経済大学日本経済史研究所）』第 9 号、2005 年。
・三原容子「『農本主義的アナキズム』の再検討」西村俊一・木俣美樹男編『地球環境と教育』論友社、1996 年。
・伊藤淳史「加藤完治の戦後開拓」『農林業問題研究』第 154 号、2004 年。
・舩戸修一「＜生命維持＞としての農業－江渡狄嶺の農本思想－」『日本農業経済学会論文集』2001 年。

本研究の背景には次のような状況が存在した。

第一に、現実の農業・農村問題がますます深刻化していたため、農政や地域の主体的な取り組みの根源的な土台、あるいは哲学的な基盤が求められていたこと。

第二に、帰農が脚光を浴び始め、新たなライフスタイルとして、もしくは新しい農業・農村の考え方として、「新農本主義」という言葉や理念がすでに使われ始めていたこと。

第三に、1990 年代以降顕在化し始めた経済と環境の対立に対し、農業分野から新たな価値観の提示が求められるようになっていたこと。

大まかにいえば、以上の三点が本研究の背景として存在した。このうち、本研究は主として第一、第二の課題を追究すべく研究会を組織して、学際的研究を始めることになった（なお、綱澤満昭、関口千佳、片倉和人、大石和男、野本京子の各氏の研究協力を得た）。

本研究にかかわる「農本思想研究会」自体は、科学研究費補助金事業として採択される以前に立ち上げられていた（2007 年度に 2 回、名古屋と東京で実施）。そのメンバーを母胎に、さらに上記の協力者をえて、本研究はスタートした。

２．研究の目的

前述した研究の背景を受けて、以下のような研究目的を掲げた。

昨今の日本の農（農林業・農山村）をめぐる議論は、WTO 体制下での自由貿易圧力が強まるなか、その固有の価値自体に視線を向けることが困難になってきた。しかしながら、食料自給率向上を目指す食育運動にせよ、国土保全に向けた中山間地域振興にせよ、日本の農がもつ固有の価値を認識し、その価値を多くの人びとに発信し、国民的合意を勝ち得ていく必要がある。そのための研究の一環として、本研究は、日本的色彩の極めて強い「農本思想」（農をめぐる思想・運動）に焦点を当て、多様な農本思想を歴史現場・社会現場で検証することを通して、その現代的意義を明らかにすることを目的としている。

ただ本研究は、直接的・具体的な政策提言を意図してはいない。その基礎・土台となる歴史的経験からの知見の提示を主たる目的としている。

３．研究の方法

農業経済学（岩崎、伊藤）に加え、教育学（三原）、社会学（舩戸）、さらには研究協力者として政治学、民俗学、歴史学等の専門分野をえ、学際的かつ総合的な研究を行う。

ただ、総花的な個別論の羅列になることを避け、歴史研究を主眼として思想・運動・政策の歴史的意義を明確に押さえつつ、それぞれの立場から現代的意義を提示するという手法をとった。

より具体的には、第一に、史的農本思想を再度位置付け直す。従来の研究史を整理し、その成果と課題を明確にすることを共通の前提にして、可能性という観点から幾つかの史的農本思想を追究する。

第二に、農本思想を 1945 年で終息した思想とは捉えずに、戦後との断絶と連続性を追究する。一つは農政にみられるもの、もう一つは地域史にみられるもの、この二つに焦点をあてて課題に接近する。

第三に、農本思想の現代性を、いま・ここに生きる思想として提示する。ただし繰り返しになるが、歴史的文脈に依拠しながら慎重に考察する必要があることはいうまでもない。

以上は主として、歴史という時間軸を延長して考察するという方法であるが、同時に空間を拡張し、農本思想を日本国内にとどめずに、中国の村治運動やアメリカのアグラリアニズムといった類似の思想・運動との比較考察をも併せて検討する。

４．研究成果

2010 年度末に 3 年にわたる研究活動（※）の総括として報告書を印刷製本した。

（※）2008 年度に 2 回、09 年度に 2 回、10 年度に 1 回の共同研究会（視察等調査も含む）を研究協力者も含めて開催した。うち 3 回は勉強会も兼ね、農本主義研究者の武田共治（弘前大学）、塩見直紀（半農半 X 研究所）、松島貞二（泰阜村村長）の各氏に講演をお願いした。

報告書（『農本思想の現代的意義に関する研究』2011 年 3 月）の目次は以下の通りである。

はじめにー共同研究の活動報告ー（岩崎正弥）
序章　農本主義研究の足跡と展望（綱澤満昭）
第Ⅰ部　史的農本思想の可能性
第１章　権藤成卿の思想ー「社稷」を中心としてー（関口千佳）
第２章　農本主義とアジア主義ー口田康信が問いかけたものー（片倉和人）
第３章　加藤一夫の「帰農」生活とその思想ー農本思想の「現代的意義」を求めてー（舩戸修一）
第Ⅱ部　農本思想の戦前と戦後
第４章　山形県庄内地方の農業倉庫建設運動と加藤完治（三原容子）
第５章　内原グループ・石黒農政再考ー戦後の活動に着目してー（伊藤淳史）
第Ⅲ部　農本思想と現代
第６章　農本主義的農民教育と戦後の地域づくりー農民福音学校を中心にー（岩崎正弥）
第７章　アグラリアニズムと農本思想の比較にみるサブシステンス的性格の検討ー現代農本思想論への手がかりとしてー（大石和男）

「はじめに」では本研究の前提と課題を中心に解説をした。3 年にわたる研究会の共通認識として、農本思想の定義ー農（農業・農村・農民）に特別の価値を認め、その価値の追求・実現をめざした思想ー、また特色として、①形態と担い手の多様性、②市場経済への対抗理念としての農を前面に出した対抗性、この二点に焦点を絞ったことを説明し、今後の課題を①海外との比較研究、②日本人の心性との関連、③農の価値の存在論、という三点が残されていることを指摘した。

序章では、昭和前期の桜井武雄の研究から 1990 年代の岩崎正弥、野本京子らの研究までの整理をし、①経済的価値に限定されない農業の意味、②社稷の普遍性、③天皇制との関連、④鬼（すなわち非稲作文化の総称）と農本主義との対抗性、の問題追究の重要性が指摘された。

社稷については、第 1 章で重点的に取り上げ考察されている。権藤成卿のいう社稷とは人間生活の原点を指す。アナーキスト岩佐作太郎の国家論と比較考察しながら、社稷に依拠する民衆のエネルギーが国家権力に利用されながらも、逆にこの地点にこそ管理化の極限に生きる現代社会の抵抗の根を見つめようとする。

第 2 章では、日本の農本思想団体が中国の村治運動（梁漱溟）の影響下に立ちあげられたことを指摘し、その立ち上げに関わった口田康信のアジア主義を通して農本思想の可能性を探ろうとしている。ある意味社稷の再考とも関わるが、「強覇」に対して「強覇」で対抗するのではなく、アジアの人々の暮らしの伝統に抵抗の拠り所を探し出す試みは時代を超えて現代でも共鳴するものだろう。

第 3 章では、より鋭く現代状況を鑑みて帰農に焦点を当て、その矛盾を自覚的に生きた加藤一夫の生涯からその現代的意義を考察しようとしている。加藤は実は 2 度の帰農と離農を経て農本思想を捨て去り、天皇信仰へと向かった。そこには都市知識人が農民になることの難しさが存在し、同様の問題を現代の帰農現場でも見られることが指摘される。

農本思想は理念だけのムーブメントではなく、地域運動や農政にも反映された。その分析が第Ⅱ部の課題である。

まず第 4 章では、加藤完治の人的な関わりによる農本主義運動が活発に展開された山形県庄内地方に舞台を設定し、現代の評価を念頭に置きながらその実像を丹念に明らかにしている。歴史史料の発掘も含めて、地方のリーダーたちによる農本主義運動からみる新たな庄内地方史が描かれる。

第 5 章では、戦前に影響力をもった「内原グループ」（石黒忠篤、小平権一、那須皓、橋本伝左衛門、加藤完治ら）の戦後の動向を考察する。1930～1950 年代の農林省の農民政策の中に彼らがどう位置付けられるかを、いわゆる石黒農政の戦前・戦後の統一的把握（「日本農政の枠内において農民の保護育成を追求した一連の施策」）によって明らかにしている。

最後の第Ⅲ部は現代をより強く意識した。第 6 章では、農民福音学校を通した農村教育に焦点を当て、とりわけ賀川豊彦の立体農業の現代性を積極的に評価しつつ、彼の後継者（藤崎盛一）による地道な教育の結果、戦後の地域づくりの実践者を育てたケース（渡辺粂蔵と岡山県新庄村）の分析をしている。また有機農業などの環境保全型農業との関連性も指摘する。

第 7 章では、アメリカのアグラリアニズムと日本の農本思想との比較分析を行う。1930 年代のアグラリアンたちの思想と農本主義との交錯が考察され、また現代のアグラリアニズムとしてウェンデル・ベリーが紹介される。その結果「サブシステンス」において、両者の間に共通項を見いだせると結論付けている。

以上は報告書としてまとめたものであるが、現代的意義という観点（合計 5 回にわたる共同研究会で議論された点）からもう少し敷衍しておきたい。

第一に、農本思想が提示する社会像である。対抗性という意味ではもう一つの社会を模索した構想が農本思想であったが、その社会をユートピアとしてのみ描くわけにはいかない。例えば第2章で暗示されているように、理想社会実現のための暴力容認がポルポト政権を生み出した歴史的事実を考えるとき、ユートピアがディストピアへと反転する危険性をも農本思想は帯びていた。おそらくもっとも穏健な農本社会像は、第6章で示された地域像－農を大切にし、物質循環や地域内・地域間での支え合いが機能している社会－に投影できるであろう。ここには近年の帰農や田園志向、繋がり・絆の重視、共生経済への共鳴などと連動する余地がある。ただそれが権力によって人間の尊厳を蹂躙する社会へと反転する危険性を踏まえるならば、改めて農本思想とファシズムの課題は現代の地平から再考察される必要があるだろう。

第二に、時代と社会を超えた人間存在の尊厳に根ざす根源性が農本思想にあるか否かという問題である。本研究では「社稷」（農業に根ざした根源的なコミュニティ）、「サブシステンス」（「自律的な生業と生活を巡って必要となる物質的・社会的基盤の構築とその保持に向けた活動」大石和男）という概念を通してその一端を示した。2011年3月11日に起きた未曾有の東日本大震災以降、原子力推進政策への疑問符とも呼応して現代文明へ警鐘を鳴らす言説が見られ始めている。1923 年の関東大震災直後、評論家の室伏高信が『文明の没落』を著し、都市文明（工業化、都市化、機械化等）を強く批判し、そうした論理がその後の農本主義運動に継承されていった史実を思い起こさせる。3・11以後では農本思想のもつ重みが増していくと予想されるが、今後「社稷」「サブシステンス」のもつ意味をさらに掘り下げつつ（例えば今回は直接の対象とはできなかった環境倫理や経済倫理等）、また第4章、第5章で示された地域運動史や農政の歴史を踏まえた政策原理を提示する必要性は増していくであろう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）

①伊藤淳史、Emigration Policy in Postwar Japan: An Aspect of Agricultural Policy and Historical Context of Japanese Brazilian Immigration、農林業問題研究、査読有、第46巻第2号、2010年、177～186頁。

②三原容子、山形県庄内地方の産業組合運動と満州移民送出運動の思想―皇国農民団を中心に―、東北公益文科大学総合研究論集、査読無、第18号、2010年、163～184頁。

③岩崎正弥、農本思想と開発理念―山崎延吉の農村計画をめぐる思想からの接近、綜合郷土研究所紀要（愛知大学）、査読無、第55輯、2010年、73～86頁。

④舩戸修一、「農本主義」研究の整理と検討―今後の研究課題を考える、村落社会研究、査読無、第31号、2009年、13～24頁。

⑤岩崎正弥、三澤勝衛と場の教育、三澤勝衛著作集（風土の発見と創造）4、農山漁村文化協会、2009年、228～235頁。

〔学会発表〕（計３件）

①岩崎正弥、農本主義的農民教育と戦後の地域づくり―農民福音学校を中心に―、日本村落研究学会、2010年11月20日、長野県上田市別所温泉（別所観光ホテル）。

②岩崎正弥・伊藤淳史・舩戸修一、テーマセッション「農本主義の戦前と戦後」を設定（座長：岩崎、コメンテーター：野本京子）、個別報告：岩崎「農本主義と山村開発―山崎延吉と賀川豊彦を中心に」、伊藤「農業労務者派米事業の成立過程―戦後における那須皓の活動に着目して」、舩戸「加藤一夫の農本主義―『帰農』生活の再検討」、日本農業経済学会、2010年3月28日、京都大学。

〔図書〕（計１件）

岩崎正弥、高野孝子、場の教育―「土地に根ざす学び」の水脈、農山漁村文化協会、2010年、286頁（岩崎担当：17～192頁）。

６．研究組織

(1)研究代表者

岩崎　正弥（IWASAKI　MASAYA）

愛知大学・経済学部・教授

研究者番号：40221791

(2)研究分担者

三原　容子（MIHARA　YOKO）

東北公益文科大学・公益学部（社会系）・教授

研究者番号：90212240

伊藤　淳史（ITO　ATSUSHI）

京都大学・農学部・助教

研究者番号：00402826

舩戸　修一（FUNATO　SYUICHI）

法政大学・サステイナビリティ研究教育機構・研究員

研究者番号：00466814